



## シベリア抑留から、ポーランドの歴史へ 建部 奈津子

初めまして、新会員の札幌に住んでいる建部奈津子と申します。職業は歯科衛生士です。入会のきっかけは第109回例会「カティンの森のヤニナ」で富田武先生が来札された機会に、例会に参加したことでした。



## 富田武先生とのご縁

富田先生とは、私が運営しているボランティア団体「シベリア抑留体験を語る会 札幌」で、昨年先生が出版された『日ソ戦争』（みすず書房）の出版記念講演会を開催したご縁です。先生の「抑留研究会」にも ZOOM で何度か参加し、私が自費出版した児童書・シベリア抑留記『黒パンと交換した腕時計』（柏艸舎）に推薦文を書いて頂きました。このような交流があり、対面でお会いできる大変貴重な機会なので迷わず例会に参加させて頂きました。

私は演題の「カティンの森のヤニナ」については、恥ずかしいですが無知でした。ポーランドと言えばショパン、ワルシャワ蜂起、アウシュヴィッツ収容所くらいしか知りませんでした。小林文乃さんの講演を聴いて、ポーランドには記念碑や慰霊碑が多いことや、その存在意義の大きさを知りました。

## 吉田欽哉氏の功績

弊会でシベリア抑留体験者の語り部をされている利尻島在住の吉田欽哉氏(98)は、78年前シベリアに抑留中ソ連将校の命令で、自らの手で仲間の遺体を何十体も、命令されるがままにシベリアのツンドラ地帯の永久凍土に埋葬しました。その時まだ20歳の吉田氏は「必ず迎えに来るからな」と手を合せて約束しました。戦後70年ごろから語り部として北海道中心に活動し始めました。

世界規模のコロナ禍やロシアのウクライナ侵攻で、ロシアで遺骨収集ができなくなったため、ご自宅の近く、海を隔ててシベリアに一番近い利尻に「シベリア抑留者慰霊碑」を、戦友への供養と平和の想いを込めて、全国や海外の皆様からの温かいご寄付により、令和5(2023)年8月末に完成しました。この取り組みが評価され、このたび第9回シベリア抑留記録・文化賞で功労賞を受賞されました。

私は学校の授業では残念ながらシベリア抑留もポーランドのカティンの森事件も教わった記憶があ

りません。日本史や世界史の授業を単に年表を丸暗記する科目ではなく、どうしたら自分事として受け止めることができるのか、世界各地で今この瞬間にも尊い命が奪われていて紛争や軍事侵攻を阻止しなければならない状況下、自分の意見が言える人間になれるのか、若い世代が普通に意見を言える社会になるのかと危惧しています。

## シベリア抑留記～黒パンと交換した腕時計

このような課題を踏まえて、私は令和4(2022)年初めに、易しく親しみやすい、読書が苦手な人にも読んでもらえるようイラストや解説を多くした児童書・シベリア抑留記『黒パンと交換した腕時計』を自費出版し、主人公の吉田さんのいる宗谷地方の全



小学校と全国の主要図書館へ寄贈しました。子どもや外国人でも読めるように漢字全てにフリガナをふり、文字も大きくしました。目や耳の不自由な方のためのサピエ図書館で音訳・点訳が公開されています。\*

私たち大人が後世へ伝えなければならない負の遺産である戦争の話は、語り部も高齢化して激減し、このまま何もしなければ風化して歴史の闇に葬り去られてしまいます。

なぜ、過去の惨劇を繰り返さないよう、20世紀の歴史を活かせないのか？ いま世界各地で起きている軍事進攻がすぐ停戦できないのか？ 国際社会は解決できず、ただ黙って不安に駆られ何もできず歯がゆい思いをしなければならないのか？ 私たちにもできることは、知識の共有、SNS による情報発信などです。聞いたことを誰かに一言でも伝えれば、時間がかかっても1ミリずつでもこの社会は変わっていくのではないのでしょうか。

今回入会させて頂いたのをきっかけに、ポーランドのことをもっと学んで、世界の中の日本として、様々な角度から視野を広げていきたいです。

(たてべ・なつこ、シベリア抑留体験を語る会札幌会長)

\* 購入(1,500円+送料)ご希望の方は「本希望」と明記し moon7250918@gmail.com へお願いします

お恥ずかしながら、

いい年になっても粗忽さは変わらない。ため息が出る。よく言えば好奇心旺盛、普通に言えば軽薄。これで七十年以上生きてこれたのだから、世の中はおおらかだ。

きっかけは映画サークルの会員交流会で池田光良さんと隣り合わせになったことから。年に百本の映画を見るといふから尊敬のまなざしで話をしてる内に、会誌の「ポーレ」を見せられた。「午後のポエジア」意味は解らないが豊平館の重厚で豪華な広間でピアノとギター演奏の写真が目に入る。「こりゃ面白そう」が躡き(つまづき)の第一歩。

二歩目が「どうしたらこの会に入れるんでしょう？」こともなげに池田さんが「私から紹介されたといってください」名刺を改めて見ると「博士(工学)」とある。こんな偉い人とは思わずに失礼したなと思ひながら

三田 剛己



「博士の紹介ならこんな俺でも大丈夫なんだろう」と安藤様に電話。驚くほどスムーズに入会が叶った。

そして総会の日。しまったと思わされたのがここから。居並ぶ人が大学教授に名誉教授・詩人協会の会長さん。一介の商人(あきんど)、住まいのリフォーム屋が入る処じゃなかったと臍(ほぞ)を噛んでも後の祭り。救いは皆さん、フレンドリーでショパンのノクターンがバックに。加えて我が師匠の檜部さんのお友達の氏間多伊子さんも役員さんのようで、美味しいウイスキーのおかげもあって一安心。

さてさて迷惑をかけずにお荷物にならぬようにと自戒して。皆様、どうぞ宜しくお引き立ての程、切にお願い申し上げます。(みた・たけみ)

ポーランドのことをもっと学びたい 齊藤 賢人

はじめまして。新会員の齊藤賢人です。東京都で生まれ、兵庫県と大阪府で育ち、愛知県豊橋市で働き、海外に出ました。そして、マレーシアとシンガポールで14年間働き、2012年に札幌に戻ってきました。現在は2つの事業に取り組んでいます。

まず、国内海外にいる帰国生専門の受験指導をオンラインで行っています。帰国生が自身の特性や経験で勝負する「自己PR型の入試」の受験指導が得意で、帰国生の願書やエッセイのネタ集めのために、世界各地を訪れています。

次に、家畜の餌となる飼料原料の取引、そして菜種油の原料となる植物のナタネや同じく油の原料となる荳胡麻や亜麻の取引もしています。家畜



の餌にできる農作物や有効な「残渣」は色々あるため、餌として使えるものを常に考えています。また、ナタネや亜麻などの植物油の原料は海外に多く、特にヨ

ーロッパ方面のものが安全で種類が多いため、調査として海外に行くことが多いです。

教育事業と飼料・油糧原料の仕事を兼ねて、今年の9月にオーストリアとチェコとポーランドに行きました。ウィーンとプラハはとても素晴らしかったのですが、私的にはポーランドは両国に勝っていました。ユニークな建築物、複雑な歴史、豊かなポエム、スープをはじめとした美味しい食事など、経験できたことすべてが感動と衝撃の連続で、わずか3日間で帰国しなければいけないのが本当に残念でした。

ポーランドのことをもっと学びたい、ポーランドの食品は秀逸でビジネスチャンスがある———と思ったので、ポーランドに関わろうと帰りの機内で決めました。札幌に戻ってすぐポーランドのコミュニティを探したところ、日本にはわずかに二つしかないコミュニティのひとつが札幌にあることを知り、ぜひとも北海道ポーランド文化協会に入会させていただきたいと思った次第です。

今回のポーランド訪問に備えて、貴協会ですっかりと学びたいと思います。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。(さいとう・まさと)

美味しい料理と子供が安心して遊べる場所 齊藤 美佳

はじめまして。この度、家族で入会させていただきました齊藤美佳と申します。入会の理由は今年の9月に初めて家族でポーランドへ行き、ポーランドが大好きになったため、この国のことをもっと知りたいと思ったからです。

滞在期間は3日間でしたが、歴史、町並み、食べ物、ポーランドの人たちの人柄に、私たち家族はすっかり魅了されました。特に、食べ物はどこで食べても美味しかったのが印象に残っています。

ホテルの朝食は今まで食べた中で最も感動した

内容でした。ピクルスや燻製、加工肉などが添加物の味と違って、しっかりと熟成された風味を感じ、食の安全レベルも非常に高いのではないかと感じました。また、ワルシャワ中央駅のショッピングモールには、とても美味しい定食屋さんがあり、どのお料理も、あまりの美味しさに感動しました。

子供を安心して遊ばせることができる環境や雰囲気があることも、とても素敵です。2歳の子供も連れて行ったのですが、公園だけでなく、子供が遊

べる場所がたくさんあり、彼は大満足でした。

帰国する飛行機の中で、「もっとポーランドを知りたいね」と夫婦で話し合い、検索をかけたところこちらの協会を見つけ、様々な活動をされていることを知りました。自分達が知らない北海道やアイヌについても大変興味があります。また、たくさんの書籍がHPで紹介されており、ポーランド協会の活動にワクワクしました。どうぞ、これからよろしくお願ひいたします。  
(さいとう・みか)



菅原未栄詩集『櫻橋』発行:炎 2023.7

北海道の冬の海はいつだって、眠りと岩礁のせめぎ合いである。  
菅原未栄詩集『櫻橋』を読み終えた胸中の第一声はこの言葉だった。

北の大地の魂

菅原氏の生まれ故郷である根室には、私の生まれた道南檜山の荒磯との共通点がある。それは漁場の喧騒と深夜の星の輝き、それらがこの地続きの北の大地では共通の言語であると知るには最適な詩集だと私には思えた。漁場を表象すると思われる詩篇「いろけ譚」にはこうある。

あの日 浜の岩作さんは自慢のピカピカクラウンで／颯爽と浜からやって来た

檜山の人たちもかつて高級車と言えばクラウンであった。そして、威勢の良い男ほどクラウンをピカピカにし潮騒を切り裂きながら海岸線を突っ切っていく。菅原氏の根室にはその時代を表す豪華さや賑わいを感じられた。かつての漁場はそうだったのだ。

幻のオホーツク共和国

また詩篇「空耳」ではオホーツク共和国の存在を知らされる。私の道南では誰もが知るように箱館共和国がかつて存在した。官軍に追われ、独立を夢見た榎本武揚と土方歳三で有名だが、菅原氏の「空耳」では「——ほんかわさああん／空からか海からか加工場からか船からか／人っこひとりいない静寂から響いてくる」や「ねこのニヤニヤ ねこのニマニマ／あれはチェシャ猫」など女性ならではの視点で描かれたオホーツク共和国が表出する。

「幻の」とあるように箱館同様の独立を目指す動きが道南だけではなく、オホーツク圏にも存在したのではないかと推測が「お嫁に行くので根室離れるってわかってたのかい」という行から感じられる。北海道共通かもしれないが住み慣れた町を離れ、新天地を求める心はこの共和国建設の精神がしら

ず道民の深奥に眠っているためと指し示すかのような一篇である。

吉田一穂の心

また吉田一穂にも触れている詩篇「かいやぐら」は秀逸と言える。木古内の漁村生まれの一穂の詩篇「ひばりはそらに」を取り上げ、自らの心に一穂が棲み付いたかのように詩篇は始まる。伊達市などで観られるシャーマンの精神にも通じるこの作品は、北海道人であることを決定づける一篇ではないかとさえ感じてしまう。

ここでは胆振圏同様「ニムオロ」や「コイ・トウイエ」といったアイヌ語が詩篇に使われ、先住民への愛にも言及する。そして、隣国ロシアとの対話が必要とされる「根室の沖の彼方 寂しくたたずむ “国後島”」で、現代のウクライナ戦争に至るまでを包括するような世界観がこの詩篇では描かれている。菅原氏自身の詩人としての大器と成熟さを表出させるこの一篇は、まさに吉田一穂の心を自らに宿らせたと言っても過言ではない、道民詩人としての尊厳が描かれていると感じられた。

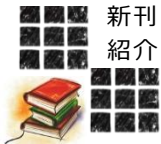
いずれにしても根室である。その根室を通じて母性や恋をフローさせつつ、北海道全体を見渡すその視点で描かれたこの詩集『櫻橋』は、多くの人に読まれるべき詩集と感じられた。

最後にこの詩集の巻末詩の最終連を抜粋して終わりたいと思う。ここに菅原氏の決意が示されている。北海道民の魂である。

ここだ ここに決めた／坊主頭は 昆布で隠し／海務に紛れて『たま迎え』／きつと 生き抜いてみせる／ただ独り この紅煙で

(小篠真琴、詩人、今金町)

祝 第9回(2023年度)シベリア抑留記録・文化賞 受賞!

新刊  
紹介

## 命の嘆願書～モンゴル・シベリア抑留日本人の知られざる物語を追って

井手裕彦 (著) 集広舎 2023.8

第2次世界大戦中、侵攻してきたソ連軍の捕虜になったポーランド軍将校ら2万人以上が虐殺された「カティンの森事件」を知る人は多いが、1943年春、ドイツ軍が虐殺現場を発見して間もなく、6,500キロ以上離れた満洲で対ソ諜報に当たっていた関東軍憲兵の1人が事件に注目し、調べていた事実を知る人はほとんどいないだろう。

私は新聞記者生活最後の年の2020年1月、モンゴル外務省中央公文書館で、大戦後モンゴルに抑留された3人の日本人が同胞の命を守るためモンゴル政府に提出した嘆願書を見つけた。うち1人のウランバートル日本軍部隊指揮官、小林多美男(1914～89)=写真1940年頃 満洲にて=が当の人物である。彼の人生を追ううち、その事実に基づき、嘆願書を巡る人間ドラマを追跡した1,296頁の著書の中で一端を明らかにした。

小林がカティンの森事件を知ったのは牡丹江憲兵隊の曹長時代。ソ連が参戦してくるとすればいつなのか、情報収集が鍵になっていた。小林は特務機関や満鉄調査部、満洲国警察などからソ連の事情に通じた者を集めて調査を進め、この事件を把握した。

## 「カティンの森」に注目した小林多美男



驚いたのはここからの小林の行動である。当時、ソ連はドイツ軍の仕業だと主張。1945年11月から始まったニュルンベルク裁判で虐殺の責任をドイツに押し付けようとした。だが、小林は東欧諸国占領地での強制連行の実態からソ連の犯行だと見抜く。

そして日本の降伏後に満洲でカティンの森と同様の暴虐が起きる恐れを感じ取った。特に国境地帯に残る開拓団員への禍いを心配し、上官の憲兵隊長に後方へ早期避難させるよう意見具申した。隊長は「居留民を動かせば軍の動きもソ連に筒抜けになる。貴様、狂ったか」と怒り、小林を一晩、留置場に放り込み、転勤命令を出した。

ところが、左遷された満洲国南西部の熱河省でソ連軍の侵攻を目にした指揮官が小林の勇氣に目をつけ、ロシア語が堪能だった小林を停戦交渉に当たらせるため特命少佐に命じた。

憲兵や特務機関員は階級が高いほど、ソ連から

「戦犯」として追及を受ける。異例の“昇進”は身の危険を大きくする。だが、小林は運命に抗えず、停戦交渉からモンゴルへ移送される日本人梯団の指揮官、收容所の日本人部隊の指揮官と進んでいく。開拓団員を救おうとした人間性は変わらず、病弱者や高齢者を守るため体を張って当局との交渉の矢面に立った。

反動は大きく、何度も監獄に投獄された。1947年秋、モンゴルから日本人は一斉に帰還が許されたが、小林は「佐官」だとの理由でソ連に残留させられ、帰国は1950年1月になった。

帰国後、会社社長に落ち着いた小林がカティンの森事件を忘れなかったことも触れておきたい。移送中、自分の軍刀を渡したソ連軍中尉が後にその刀を返したいと申し出たことから、小林は1988年4月、東京の駐日ソ連大使館に招かれた。刀の返還が終わった後、小林は大使にこう訴えた。

「カティンの森事件について最近、ソ連、ポーランド両国の専門家が合同で実態調査を始めたと聞いていますが、未解決のシベリア抑留問題もゴルバチョフさんによって調査は可能ではないでしょうか」

ソ連に「戦犯」として連行された日本人抑留者の生死が機密のままであることを指していた。カティンの森事件に関してソ連は翌年、自国諜報機関の犯行と認め遺憾の意を表明したが、日本人「戦犯」抑留者は、小林の訴えも空しく、未だに死の真相がわからない者もいる――

シベリア抑留は日本人だけに降りかかった受難ではない。スターリン時代のソ連は占領した国で捕虜にした将兵や政治犯として捕えた市民を收容所に送り込んだ。ポーランドはその代表で、本書には日本人のまわりにポーランド人捕虜がいた場面も出てくる。約120万人の一般市民がロシアに強制連行された今のウクライナ侵攻にも通じる。

(井手裕彦、元読売新聞大阪本社論説委員・編集委員)

著者割(8,000円)で本書購入ご希望の方は、早めに090-2705-9901かidei5487@outlook.jpへ